

林町集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

宮西・一角遺跡

(第8次調査)

2019年8月

瀬賀一哉
高松市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、林町集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、宮西・一角遺跡（第8次調査）の報告を収録した。
- 2 発掘調査地並びに調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調査地：高松市林町字宮西76番8及び76番9
調査期間：平成30年7月26日～同年8月21日（実働18日）
整理作業：平成30年9月1日～令和元年8月30日
調査面積：約272m²
- 3 発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、費用は事業者が負担した。
- 4 現地調査は高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員の波多野篤及び非常勤嘱託職員の三輪望が担当した。整理作業は主に三輪が行った。報告書の原稿は第1章を波多野、それ以外は三輪が執筆し、本書の編集は三輪が担当した。
- 5 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の方々及び関係諸機関から御協力と御教示を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順、敬称略）。
香川県教育委員会、株式会社 イビソク、東建コーポレーション株式会社
- 6 本調査に関連して、以下の業務を委託発注により実施した。
遺物写真撮影 西大寺フォト
X線写真撮影 株式会社イビソク
- 7 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）に従った。また、方位は座標北を示す。
- 8 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
S H : 積穴建物跡 S D : 溝 S K : 土坑 S P : 柱穴 S X : 性格不明遺構
- 9 本書で使用している挿図の縮尺は図中に記した。また、写真図版の遺物の縮尺はすべて任意である。
- 10 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 発掘調査の経過(調査日誌抄)	2
第3節 整理等作業の経過	2
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査方法	7
第2節 基本層序	7
a 調査地周辺	7
b 調査地	9
第3節 遺構・遺物	13
a 弥生時代	13
b 中世	22
c その他の時代	24
第Ⅳ章 総括	
第1節 本調査地の調査成果	27
第2節 本調査地の位置付け	27

挿 図 表 目 次

第1図 調査区位置図(S=1/2,500)	1
第2図 高松平野と遺跡の位置	3
第3図 周辺の主要遺跡分布図(S=1/5,000)	4
第4図 微高地の分類と調査地の位置	4
第5図 調査区周辺の調査成果(S=1/2,500)	8
第6図 調査区東壁断面図(S=1/40)	8
第7図 II層出土遺物(S=1/4)	10
第8図 遺構配置図(S=1/100)	11, 12
第9図 SHO1平・断面図 (S=1/80・1/40)	14
第10図 SHO1出土遺物実測図(S=1/4)	15
第11図 SXO1平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/80・1/40、1/4・1/2)	17
第12図 SKO2平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/20、1/40)	19
第13図 SKO3平面図、出土遺物実測図 (S=1/40、1/4)	20
第14図 SKO4平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/40、1/4)	20
第15図 構・ピット平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/40・1/100、1/4・1/2)	21
第16図 SDO7平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/100・1/40、1/4)	23
第17図 SDO9平・断面図 (S=1/100・1/40)	24
第18図 SDO9出土遺物実測図(S=1/4)	24
第19図 その他の時代の遺構 平・断面図 (S=1/100・1/40)	25
第20図 遺構外出土遺物(S=1/4)	25
第21図 本調査地周辺の主要遺構配置図	28
第1表 遺構番号対応表	11, 12

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯（第1図）

高松市林町字宮西76番8及び76番9で集合住宅の建設が計画された。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、南側には宮西・一角遺跡が隣接していることから、任意の協力のもと平成30年4月5日付けで当時の土地所有者から本市教育委員会（以下、市教委）に埋蔵文化財の試掘調査依頼が提出された。依頼を受けて、市教委は同年4月17日に実働1日で試掘調査を実施し、事業地内の全域で遺構や遺物を確認した。その結果を受け、香川県教育委員会へ報告し、事業地全城が周知の埋蔵文化財包蔵地「宮西・一角遺跡」の範囲に追加登録された。

これを受け、事業者と市教委で設計変更等の協議を行ったが、遺跡に影響のある工事掘削は避けられず、同年5月22日付けで事業者から埋蔵文化財発掘の届出が市教委に提出された。その後、香川県教育委員会（以下、県教委）に連携したところ、同年5月29日付けで工事着工前に建物基礎の柱状改良を実施する範囲と合併浄化槽設置箇所を発掘調査、擁壁設置箇所を立会調査で対応するようにとの行政指導があった。

その後、発掘調査の実施に向けて事業者と市教委は協議を重ね、費用面などの合意が形成されたことから、同年7月1日付けで事業者と業務を管理する高松市、調査・整理作業を管理する高松市教育委員会の3者で、「林町集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として協定を締結し、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

なお、発掘調査終了後の平成31年2月に、同一地番で当初事業地から除外されていた範囲で第2期工事として集合住宅の新築工事が同一事業者によって計画された。当該範囲は試掘調査を実施していないことから、事業者から市教委に試掘調査依頼が提出され、同年3月12日に試掘調査を実施した。試掘調査では遺構は認められず、追加となった当該範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないとの判断に至った。



第1図 調査区位置図 (S=1/2,500)

第2節 発掘調査の経過（調査日誌抄）

発掘調査の対象となったのは、事業地北側に位置する建物基礎を設置する前に行われる地盤改良（柱状改良）と合併浄化槽設置箇所である。このうち、柱状改良は密な施工が計画されていたことから、遺構の状況を正確に把握することと効率的に調査を実施するため、事業者等と協議の上、建物範囲は平面的に発掘調査することとした。発掘調査の実施に当たっては、土量が多くなること、調査地の湧水が豊富であることから、現場管理を円滑に行うため東半（調査時はA区と呼称）と西半（同B区）の2回に分けて調査することとした。

発掘調査は平成30年7月26日から東半の調査に着手し、同年8月21日に西半の調査区を埋め戻して現地での作業は終了した。主な調査経過は、下記の調査日誌抄のとおりである。

調査日誌抄（平成30年7月26日～同年8月21日 実働18日）

7月26日（木） 調査区を設定する。試掘調査で遺構の多かった建物東半（A区）の重機掘削から開始した。溝などの遺構を検出した。

7月27日（金） A区の重機掘削を完了し、検出遺構の掘削を開始した。

8月1日（水） A区の西側に南北溝があり、本日で掘削が完了した。その後、南北溝以外の遺構の再検出を行った。堅穴建物跡と考えられる遺構を検出し、調査を始めた。

8月9日（木） A区の平面図の作成が完了した。重機による調査区の埋め戻し作業を行った。

8月16日（木） 建物西半（B区）の重機掘削を開始した。重機掘削は本日で完了した。

8月17日（金） B区の遺構検出を行った。土坑や溝などの遺構を検出した。遺構の調査を開始した。

8月19日（日） B区の遺構の調査が完了し、平面図の作成も完了した。

8月20日（月） 全景写真を撮影するための清掃を行い、全景写真を撮影した。その後、遺物包含層の掘削を行い、いくつかの遺物の出土状況の記録を作成した。

8月21日（火） 重機による調査区の埋め戻しを行った。調査機材を撤収し、本日で現地での作業は全て完了した。

第3節 整理等作業の経過

調査終了後、平成30年9月から整理作業を開始した。まずは9月に遺物洗浄や遺物の接合関係の把握と一部の接合作業等の基礎整理作業を行った。その後、平成31年1月から本格的な整理作業を開始し、遺物実測作業や遺構図のトレース作業などを進めた。同年5月にはこれらの作業が概ね完了し、それ以降は原稿の執筆や編集作業を中心に進めた。なお、整理期間中の同年3月に、出土遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託するとともに、金属製品のX線写真の撮影を株式会社イビソクに依頼した。

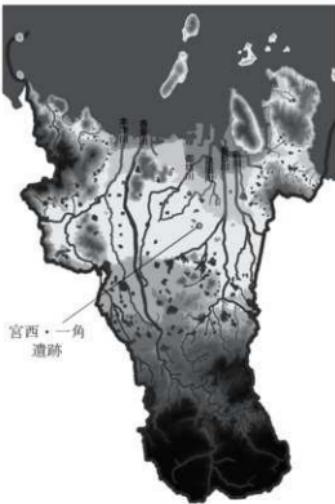
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境（第2図）

高松市は香川県のほぼ中央に位置し、東は立石山地、西は五色台、堂山山地、南は東西に走る讃岐山脈に囲まれ、市域の大部分には高松平野が広がっている。この山々は花崗岩の上に安山岩及び凝灰岩類が覆うことで風化をまぬがれて形成されたもので、平野部でも星島や石清尾山塊、由良山等のメサや独立丘が点在し独特な景観を形作っている。高松平野はこれらの浸食が進んだのち河川堆積によって形成されたものである。讃岐山脈から新川、春日川、詰田川、御坊川、香東川、本津川が北流し瀬戸内海へ注いでいるが、中でも香東川の堆積作用が最も大きく、春日川以西は香東川によって形成された扇状地であると考えられている。現在の香東川は近世初頭に生駒家の家臣西鶴八兵衛によって改修されたものであり、かつては石清尾山塊の南麓から平野中央部へ東北流する主流路が存在していた。自然流路等は地中に埋没しているが、香東川による浅い開析谷や微高地を利用して多数の溜池が築造されており、空中写真や発掘調査でもその痕跡を確認できる。

宮西・一角遺跡は高松平野のほぼ中央に位置する。遺跡の周辺は県教委による空港跡地整備事業に伴う発掘調査が行われているため、平面的に地理的及び歴史的環境が明らかになっている地域である。高松平野は高橋学により微地形復元がされている（高橋1992）。藏本晋司はこれに加え発掘調査で検出された自然流路や低地部から、空港跡地遺跡周辺を5つの微高地に大別し、微高地ごとの遺跡の動態を整理している（藏本1997）。この整理をもとに波多野篤は空港跡地遺跡の弥生時代の動向を整理しており、特に今回の調査地が所在する微高地の南側の地形について検討している（波多野2014）。

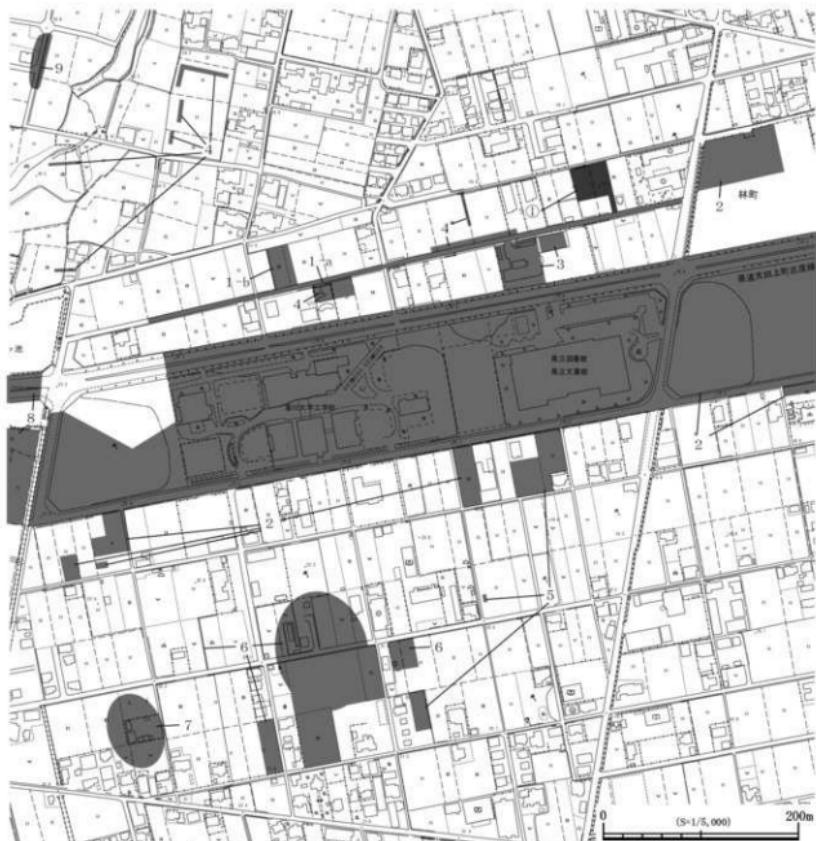
藏本による整理を踏まえると、本調査地の東側は弥生時代後期前半の低地部、西側は弥生時代前期から中期初頭の自然流路によって画されているB1微高地上に位置する（藏本1997）。また、既往の発掘調査から空港跡地遺跡B地区、L地区北側では基盤層の上に弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を被覆して形成された遺物包含層と、部分的に中世の遺物包含層が確認されている。この遺物包含層は東側がやや厚く堆積することからB1微高地の東側を画する低地部と関連する土層と考えられている。そして今回の調査地に南接する宮西・一角遺跡、一角遺跡では3本の自然流路（宮西・一角遺跡西から順に、SR03、SR02、SR01）が検出されている。



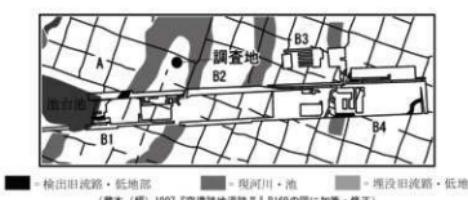
第2図 高松平野と遺跡の位置

第2節 歴史的環境（第3・4図）

この節では本遺跡周辺の状況を理解するためB1微高地の北側の歴史的環境について整理する。旧石器時代及び縄文時代の遺構は本遺跡周辺ではほとんどみられず、弥生時代前期後半からみられる



第3図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/5,000)



第4図 微高地の分類と調査地の位置

るようになる。本遺跡周辺の旧地形は藏本の整理から、複数の自然流路と微高地からなる起伏に富んだ地形であったことが推定されている。微高地上に土坑等が形成され（一角遺跡、空港跡地遺跡）、B 1 微高地の西を画する宮西・一角遺跡の自然流路（S R O 3）からも当該期の土器が出土している。弥生時代中期は該当する遺構がほとんど見られなくなり、S R O 3 も中期初頭には大半が埋没し、一部が低地部として残る。

弥生時代後期前半から古墳時代前期前半になると、空港跡地遺跡B地区中央に位置するS R b O 1 が後期中葉までに埋没するなど自然流路等の埋没が進んだが、宮西・一角遺跡のS R O 1 など依然として複数の低地部が存在し、それらに挟まれた微高地上に居住域が確認できるようになる（宮西・一角遺跡、弘福寺領讃岐国田園調査南地区、空港跡地遺跡）。特にB 1 微高地の西端を画する低地部を挟んで東西の微高地上の広範囲で、堅穴建物跡が検出されている。B 1 微高地上に広がる居住域について一角遺跡で検出された弥生時代後期の堅穴建物跡も、本調査地との距離の近さから同じ居住域に含まれるものと考えられる。

古墳時代では、後期前半までの遺構は希薄だが後期後半から住居跡等が見られるようになり、小規模な集落が点在する様相を呈する。

8世紀後半からは土地利用が活発化し、微高地上に建物だけではなく灌溉網が形成される。空港跡地遺跡B地区は南北方向の基幹水路が開削され、掘立柱建物跡も含め概ね条里地割に沿っている。L地区でも弥生時代後期の遺物包含層が広がっていた場所で条里地割に沿う溝が複数検出され、本遺跡の西側を北流する宮西・一角遺跡のS R O 1 は弥生時代に完全に埋没せずに、その埋没過程で畦畔が形成されていたことから、後世にその低地部の一部は水田等の生産域として土地利用されたと考えられる。宮西・一角遺跡のS R O 2 はS R O 1 と異なり畦畔は検出されていないが水田であった可能性が指摘されている（市教委2000）。B 1 微高地の南側では古代寺院の拝師庵寺比定地があり、西へ離れた箇所で9世紀後半の木棺墓が出土している。

本調査地の東側は日本最古の田図「弘福寺讃岐国山田郡田図」の南地区に比定されている。本市教委が調査を行っているが、古代・中世の遺構はあまり認められず、比定地の確定には至っていない。

中世には、古代に整備された灌溉網や居住域が廃絶し、12世紀前後から再開発が行われる。自然流路の位置を除くほぼ全域で条里地割に沿う溝や小規模な建物が形成される。13世紀前半には微高地の広範囲で建物群が展開し、特に空港跡地遺跡東側では建物が集まるだけでなく溝で区画された居館が出現する（県教委2000）。古代は低地部に水田を形成しただけではなく微高地頂部にも基幹水路等の灌溉水路網を構築していたが、中世は微高地の縁辺部で積極的な開発が行われ、居館の出現を含めて古代とは大きく異なる集落景観が成立したと評価されている（佐藤2000）。本調査地周辺では微高地上で小型建物からなる建物群やピット群が検出されている（空港跡地遺跡、宮西・一角遺跡）。中世後半になると今まで希薄だった微高地上でも建物群や溝が展開するなど、前時代よりも建物群が増加する。また、宮西・一角遺跡では第7次調査区付近で16世紀の区画溝とピット群が検出されており、本遺跡周辺にも屋敷地に伴う遺構が散在的に分布した集落形態が推定できる。

近世以降になると、宮西・一角遺跡、一角遺跡、本遺跡周辺の空港跡地遺跡等では条里地割に沿う溝や出土遺物が確認されているが、本調査地よりも東側の微高地と比べて非常に希薄なため、田畠が広がっていたと考えられている。東側の微高地では集落が展開し、そこからは土器が豊富に出土したため、17～18世紀の高松平野の土器編年の指標となっている（空港跡地遺跡）。また、周辺には吉国寺と岩田神社が所在したことが知られる。空港跡地遺跡西側では、少なくとも昭和19年以前の築造と考えられる池台池の桶管と堤防が検出されており、この頃には池台池が築造されたと考えられ

ている。

参考文献

- 藏本晋司 1997 「地形環境の復元」『空港跡地遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
- 高橋学 1992 「高松平野の環境復元」『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書』高松市教育委員会
- 佐藤竜馬 2000 「中世林地城の村落景観」『空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・香川県土地開発公社
- 波多野篤 2014 「弥生時代前期から後期にかけての調査地周辺の調査成果」『上林本村遺跡』高松市教育委員会・高松市埋蔵文化財調査報告第156集
- 香川県教育委員会 1996 『空港跡地遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会 2000 『空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会 2002 『空港跡地遺跡V』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会 2003 『インテリジェントパーク整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 空港跡地遺跡(K地区)』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会 2004 『空港跡地遺跡III』香川県教育委員会・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会 2007 『空港跡地遺跡IX』香川県教育委員会
- 高松市教育委員会 1992 『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書』弘福寺領讃岐国山田郡田園調査委員会・高松市埋蔵文化財調査報告第37集
- 高松市教育委員会編 2000 『一角遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第44集
- 高松市教育委員会編 2000 『宮西・一角遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第48集
- 高松市教育委員会編 2001 『宮西・一角遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第55集
- 高松市教育委員会編 2018 『宮西・一角遺跡(第7次調査)』高松市埋蔵文化財調査報告第197集
- 高松市教育委員会編 2010 『拌師庵寺』高松市埋蔵文化財調査報告第129集

第III章 調査の成果

第1節 調査方法

調査区の設定と掘削方法

発掘調査区は事業地の北側部分に設定し、東西を2区画に分けて遺構密度が高いと想定された東側から発掘調査した。掘削方法は、遺構面までの掘削を重機で行い、その後、人力で遺構検出・掘削を行った。B区では遺物包含層が遺構の基盤となっていたことから、遺構の調査を終えたのちに遺物の多寡を慎重に観察しながら重機によって掘削した。

図化作業・遺構番号・遺物の取り上げ

遺構図面は、事業者が実施した土地境界測量で取得していた国土座標を用いて手測り測量で作成した。水準は、平成29年度に本市が実施した宮西・一角遺跡（第7次調査）の調査地点が近隣に位置していたため、その調査で用いた水準を調査担当者が直接水準で移動して用いた。

遺構番号は、現地では遺構の略号（SH・SK・SP・SX・SD）を冠して、その後ろに番号を与えて管理した。ただし、整理作業の過程で、遺構の認識を容易にするため、遺構番号を再整理した（遺構一覧表を参照のこと）。

遺物は、主に遺物包含層単位と遺構単位で取り上げた。

第2節 基本層序（第5・6図）

a 調査地周辺

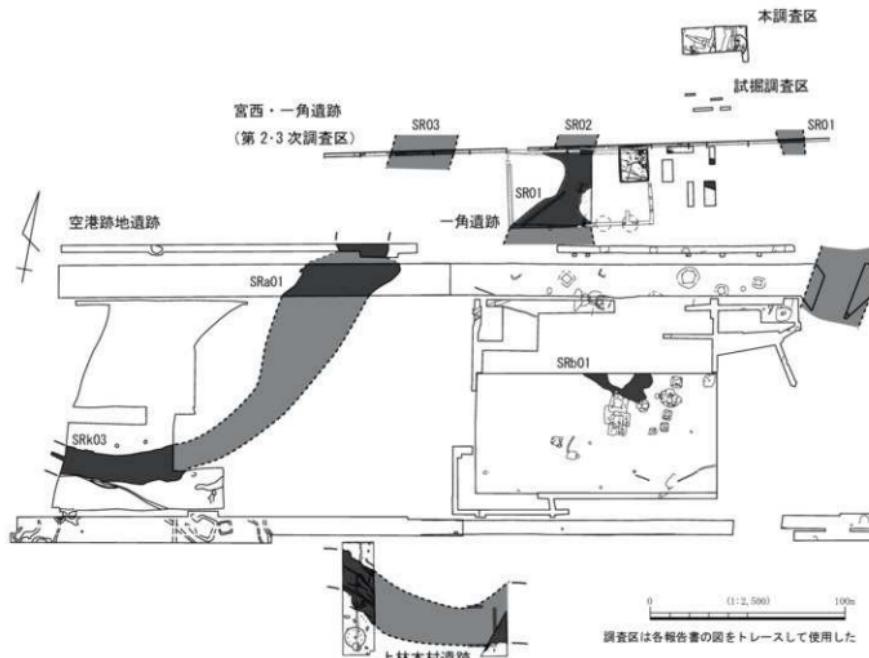
地形

地理的・歴史的環境でも述べたように、当調査地周辺は既往の発掘調査及び研究から大別して5つの微高地に分かれると理解されており（巻本1997）、その理解に従うと当調査地はB1微高地にあたる。当調査地周辺では複数の自然流路及び遺物包含層が検出されている。発掘調査の結果から、①地点により遺構検出面の表層部の土質が異なること、②調査地内で河川堆積に起源する遺物包含層が検出されていることから、周辺の自然流路の影響を受けた堆積環境であったことが想定される。

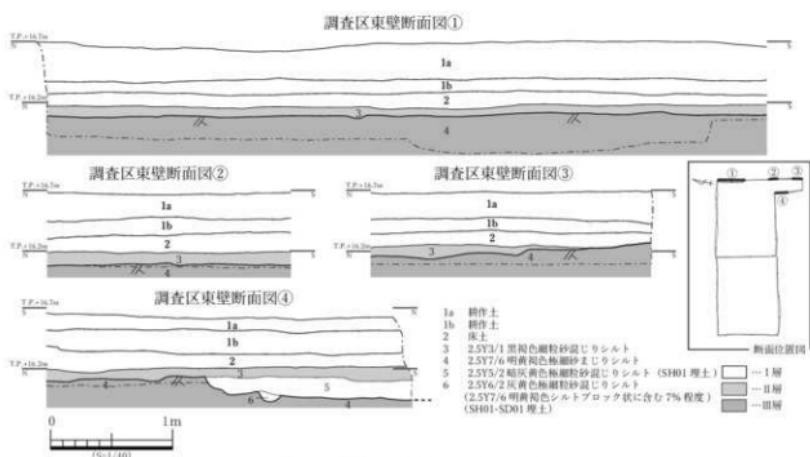
まず、事業地周辺の地形環境について県教委や市教委の発掘調査から明らかにされた東西方向の地形の検討を行う。東西方向は空港跡地遺跡の発掘調査報告書で検討されているが、今回改めて第1～7次宮西・一角遺跡の調査結果を加えて検討する。なお、遺跡の検出面の標高値は自然流路の岸付近の起伏が少ない安定した場所で測定した。

西から確認すると、A微高地の第7次調査地付近は遺物包含層が確認されず地山直上で複数時期の遺構を検出しており、遺構検出面の標高値は18.52m前後である。同じ水準を用いて計測した東へ約400mの距離にあるB1微高地の本調査地の標高値は16.09mで、両地点の比高差は2.43mである。遺構を密に検出した第7次調査地点は本地点と比べても微高地にあたることが推定できる。

次に同じ水準で調査された宮西・一角遺跡の第1～6次調査の成果を見ると、B1微高地西端のSR03西岸は遺構検出面の標高値は18.72m前後、SR02西岸の遺構検出面の標高値は18.77m前後、SR01東岸の遺構検出面の標高値は18.12m前後である。西側にあるSR03から東側のSR01までの約220mの距離で0.6mの比高差を有して東へ低くなっている。より細かく見ると、SR03からSR02間は比高差があまり見られずほぼ平坦であるのに対して、SR02からSR01間は地形が急激に低くなる場所であることがわかる。以上の整理からB1微高



第5図 調査区周辺の調査成果 (S=1/2, 500)



第6図 調査区東壁面図 (S=1/40)

地はA微高地よりも低地にあり、B1微高地の中でもSR02以東は相対的な低地部と捉えることができる。

自然流路・遺物包含層

本遺跡周辺では複数の自然流路や遺物包含層が確認されている。既往の調査から対応関係を整理すると、宮西・一角遺跡SR03は空港跡地遺跡のSRA01、SRK03に連続し、宮西・一角遺跡SR02は一角遺跡のSR01に連続する。これら自然流路の名称を宮西・一角遺跡に従うと、本調査地周辺では自然流路が西からSR03、SR02、SR01の合計3条存在したと整理できる。

SR03は今回の調査区からやや離れ、B1微高地の西端を構成する自然流路で、弥生時代前期～中期初頭の遺物が出土し、古代まで低地部として残る。SR01、SR02は弥生時代後期末～古墳時代前期に埋没し、その後古代まで低地部として残る。この他に当地周辺ではSR02の上流部や微高地東端などで、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を被覆する遺物包含層や自然流路が検出されている。

遺物包含層はSR02の上流部では5～25cm前後、微高地東端では15～60cm前後の厚さで堆積する。自然流路と同様に深度が浅く立ち上がりがなだらかであり、出土遺物の時期も近いため、形成要因が非常に近いものと考えられる。微高地東端の遺物包含層は東側にむかって厚く堆積することからB1微高地の東側を画する低地部である可能性が指摘されていたが（乗松2004）、北側に宮西・一角遺跡SR01が位置することからその一部がこれに続く可能性もある。

今一度整理すると、調査地周辺は巨視的に概観すると標高が西から東へ下る地形で、微視的に見るとSR02以東は複数の自然流路が流下する相対的な低地部にあたる場所と言える。その低地部は河川堆積に由来する土層が広範囲に分布する堆積環境と言える。なお当調査地は、自然流路SR01とSR02に挟まれた地点に立地する、周辺の自然流路に影響を受けるような地点に当たることが調査成果から分かる。

b 調査地

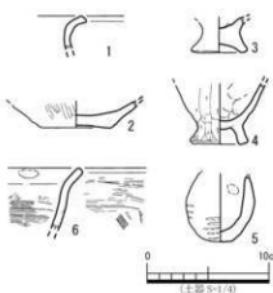
地形

調査区内の地形は、東西間をみると北西端の地山標高値は16.17m前後、北東端の地山標高値は16.09m前後であり東へ向けて標高が低くなる。また、同じ水準を使用して実施した南側隣接地の試掘調査地の地山標高値は15.90～16.18m前後であることから、多少の起伏が存在する地形面と言える。

層序

当地の基本土層は大別して3層にまとめることができる。I層は耕作に伴う土層で、層厚が0.4～0.52mで水平に堆積している（第6図1a、1b、2層）。II層は黒褐色の河川堆積起源土で層厚が0.05～0.12mで、弥生時代の遺物を含む遺物包含層である（第6図3層）。III層は地山である（第6図4層）。このうちII層は、III層を被覆する土層で調査区東側の壁面の観察では南に向けて緩やかに層厚を減じていた。II層の平面分布は調査地全体に広がる傾向にあるが、特に調査区の南側と東側で厚く堆積する状況を確認でき、工事立会の結果からも調査区南側の広範囲に分布することを確認した。既述したように、当地は自然流路に挟まれた場所であることから、II層は周辺に所在した自然流路を供給源とする自然堆積層と考えられる。III層は遺物が出土せず、西側では一部で疊層、東側では細粒砂まじりシルト～粗砂になる。複数の平面・断面で自然流路としての岸の検出を試みたが個別の自然流路になるような状況ではなかったため、河川堆積の細別層を確認したものと考えられ

II層出土遺物



第7図 II層出土遺物 (S=1/4)

る。遺構面はII層上面とIII層上面である。

II層出土遺物 (第7図)

II層からは1～6が出土している。1、2が壺、3～4が製塙土器、5がミニチュア土器、6が土師質土器の鍋である。

1は壺の口縁部片であり、口縁部外面は平坦にしあげる。2は壺の底部である。外面に縦方向のヘラミガキを施し、底部の地面接地面にはヘラケズリを施す。3、4は脚台のある製塙土器の底部である。3は全体が摩滅し、表面の剥離が激しい。4は、外面が脚部底面以外はヘラケズリ、体部内面は指オサエを施す。内面には指オサエに伴う爪状圧痕も見られる。5はミニチュア土器の底部である。外面は体部下半にタタキが施され、内面は口縁部付近で指オサエを施す。6は湾曲した体部から口縁部がくの字に折れ曲がる。内外面にハケを施し、口縁部はナデや指オサエを施す。この遺物のみ所属時期が異なるため、混入品と考えられる。所属時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

第3節 遺構・遺物（第8図）

a 弥生時代

(1) 壺穴建物跡

SHO 1（第9・10図）

調査区東側の南東端で検出した壺穴建物跡である。III層上面で検出した。周囲はII層が広範囲に分布する場所で、SHO 1は全体的にII層で被覆された状態であった。床面で主柱穴は確認できおらず、確実な中央土坑の検出にも至っていないことから、壺穴建物跡ではなく遺物包含層の可能性も想定したが、①平面形状が円形基調で規模が大きいこと、②楕円形の平面形状に沿う形で円弧を描く溝（SHO 1-SDO 1）を検出し、壺穴建物跡の周壁溝と想定できること、③床面で複数のピットを検出し、SHO 1埋土から一定数の土器が出土したこと、以上の諸点から壺穴建物跡として報告する。

SHO 1の西端はSDO 7に破壊され、南側は調査区外へと続くが、平面形状は円形と考えられる。直径1.0m以上、検出面から床面までの深度は0.03~0.12mである。SHO 1の埋土は単層であり、貼り床は認められなかった。南東部分では周壁溝が巡り、床面直上で土坑2基、ピット5基を検出した。

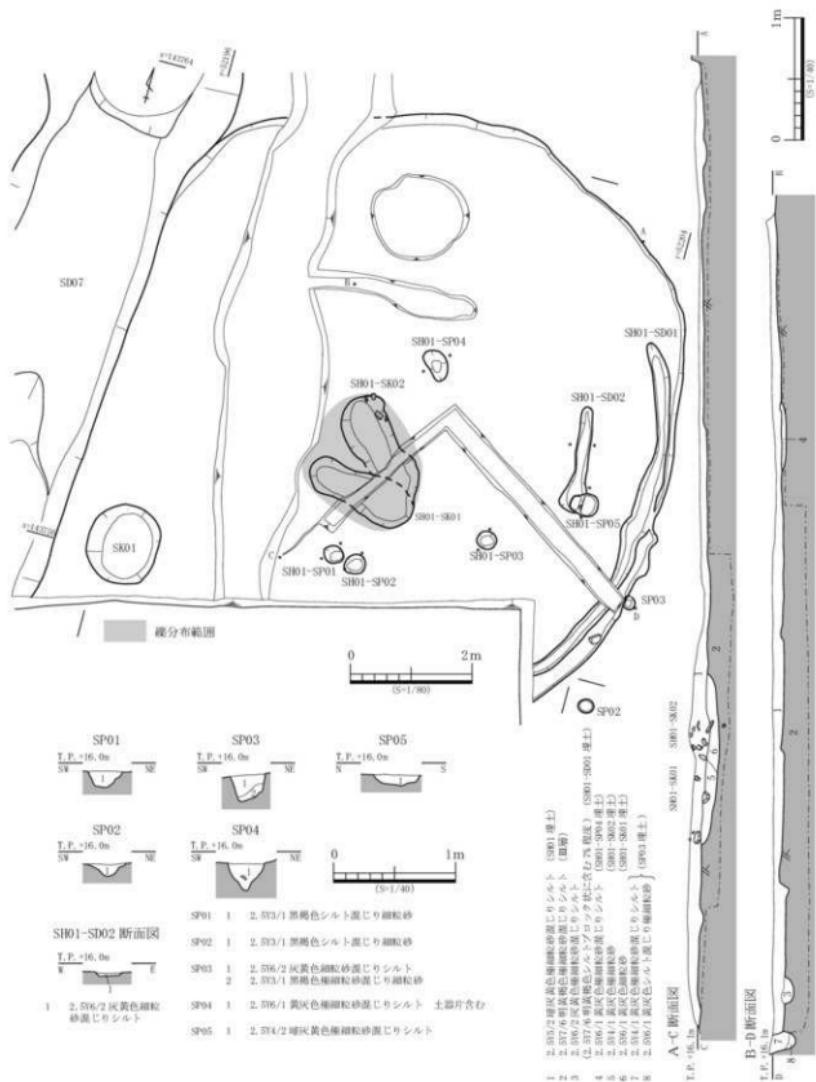
SHO 1-SK0 1、SK0 2は壺穴建物跡の中央付近に位置する土坑である。SHO 1-SK0 2が先行しSHO 1-SK0 1が後出する。双方とも平面形状は楕円形であり、SHO 1-SK0 1の長軸は1.8m、短軸は0.78m、床面からの深度は0.1mで埋土は黄灰色細粒砂の単層である。SHO 1-SK0 2は長軸が1.85m、短軸が0.8m、床面からの深度が0.11mで埋土は黄灰色極細砂の単層である。双方の土坑の埋土や直上のSHO 1埋土からは、多数の土器と共に拳大から人頭大の円礫が出土した。ただし、炭化物は確認できず焼土も確認できなかつたため、炉跡等の中央土坑とは考えにくい。

ピットは中央付近で不規則な配置で検出した。なかでも、SHO 1-SP0 3、04は床面から0.2m前後の深度があり、SHO 1-SP0 5も最深部で床面から0.21mである。

出土遺物 SHO 1はII層に被覆されていたため、検出中に出土した遺物はII層の遺物を含む可能性がある。このためSHO 1埋土の遺物とは分けて報告する。遺物は主にSHO 1検出時出土、埋土中、床面直上、土坑から出土した。埋土中や床面直上から出土した遺物は、遺構全体から散漫に出土した。その中でもSHO 1の南側や北東側に集中する傾向があった。土坑及びその直上に広がる礫集中部分からは、SHO 1の中で特に多くの遺物が出土した。出土遺物も比較的遺存状況が良好なものが多く、遺構検出時から土坑の底面にかけて片寄りなく出土した。

7~12はIII層上面でSHO 1を検出中に出土した遺物である。7は壺の口縁部であり、口縁端部にナデを施す。8、9は壺の口縁部である。双方とも口縁端部を上下に拡張させるが、8は器壁が薄く口縁部が頸部から緩やかに広がる。9は口縁部が強く外反する。10は高杯ないし鉢の口縁部である。11は製塙土器である。内面は強い指オサエを施し、体部外面にヘラケズリを施す。12は鉢の口縁部である。口縁部を接合したのち強いヨコナデを施す。

13~21はSHO 1埋土出土遺物である。13~15は壺底部である。13は内面にヘラケズリを施す。15は外外面にヘラケズリを施す。16~19は壺である。16、17は広口壺の口縁部である。両方とも直立気味の頸部から口縁部が大きく外反する。17は16よりも口縁端部を上方へ強く捕まみ上げる。18は体部から底部にかけての資料で、SHO 1北東部分の床面直上で出土した（写真図版4-1）。外面上方向のハケ及びヘラミガキを施す。20は高杯の口縁部である。口縁端

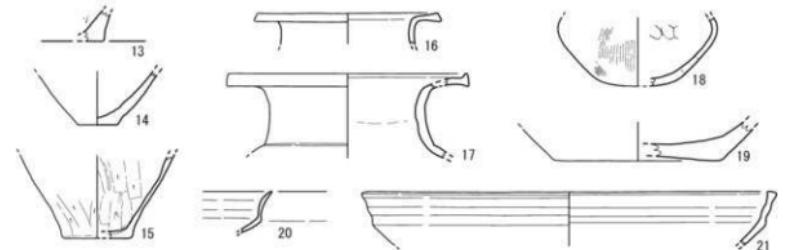


第9図 SHO 1 平・断面図 (S=1/80・1/40)

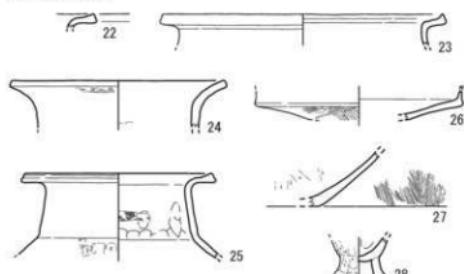
SHO1 検出時出土遺物



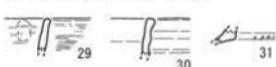
SHO1 埋土出土遺物



SHO1 繪出土遺物



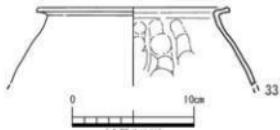
SHO1-SK01 周辺出土遺物（縄周辺）



SHO1-SK01 出土遺物



SHO1-SP04 出土遺物



0
(全部 5-1/4)
10cm

第10図 SHO1出土遺物実測図 (S=1/4)

部にやや強めのヨコナデを施す。21は鉢の口縁部である。口縁部に強いヨコナデを施し、端部は平坦に仕上げる。

22～28はSHO1-SK01、SK02とその上位を被覆する縄集中部分から出土した遺物である。22、23は甕の口縁部である。24、25は甕の口縁部である。24は口縁部が頸部から緩やかに外反する形状で、外面にはヨコハケを施す。25は頸部はやや内傾し口縁部は強く外反する。頸部内面に指オサエのうちにヨコハケ、体部外面にタテハケを施す。26は高杯の杯部の下半部分である。外面に横方向のヘラケズリのうち斜方向にヘラミガキを施す。27は壺の底部である。外面はヘラケズリのうち、タテ方向及び斜方向の細かいヘラミガキを施す。28は製塩土器の脚部である。

29～31は縄集中部分周辺から出土した遺物である。29、30は壺の口縁部である。29は内外面に横方向のヘラミガキを施す。31は壺の口縁部の下半部分である。屈曲部分に刻目文を施す。

32はSHO1-SK01から出土した甕の口縁部である。口縁部側面にヨコナデを施す。33はSHO1-SP04から出土した甕の口縁部である。体部から強く外反して短く外側にひらく口縁部をなす。

所属時期 一部弥生時代中期に遡るものもあるが、主体を占める遺物から弥生時代後期中葉の遺構と考えられる。

(2) 性格不明遺構

S X O 1 (第11図)

調査区西側の中央で検出した遺構である。II層上に形成された遺構であり、S D 0 9 に先行し S D 0 4 の埋没後に形成される。平面形状は隅丸方形であり、長軸5. 8 m、短軸5. 3 6 m、検出面から床面までの深度は0. 0 6 ~ 0. 2 3 mである。床面直上で土坑2基、ピット1基検出した。

東西方向の断面を確認した結果、壁面の立ち上がりが垂直であり、掘り形の規模と形状から考慮すると竪穴建物跡の可能性がある。しかし、柱穴が1基しか存在せず、周壁溝が検出できなかつたこと、前述したS H O 1 と比べ遺物の出土量が少なかつたことから性格不明遺構とした。

S X O 1 - S K O 1 はS X O 1 床面の北東部分で検出した土坑である。S X O 1 - S K O 1 の平面形状は梢円形であり、長軸は1. 3 m、短軸は1. 1 m、検出面からの深度は0. 3 1 mである。埋土は黄褐色細砂混じりシルトの単層で、遺物が多く出土した。S X O 1 - S P O 1 はS X O 1 床面の北東部分で検出したピットである。平面形状は円形で直径約0. 6 m、検出面からの深度は0. 0 8 mである。埋土は黒褐色細砂混じりシルトの単層である。遺物は出土していない。

出土遺物 遺物は埋土の北半でも出土したが、南半から多くが出土した。また、S X O 1 北側中央付近の埋土中から鉄鏃が出土した。いずれも小片であり、摩滅を受けているものが多い。

3 4 ~ 4 7 はS X - 0 1 埋土から出土した遺物である。3 4 は甕の口縁部である。口縁端部を上方へ摘まみ上げる。3 5 ~ 4 1 は壺であり、3 5 ~ 3 8 は口縁部である。3 5 、3 6 は水平気味の口縁部であり、端部を摘まみ上げる。3 8 は器壁が薄く緩やかに外反する。3 9 は長頸壺の頸部である。外面にタテハケ、内面に指オサエを施す。内面の指オサエの痕跡には網目状の凹凸が見られ、どの指オサエの痕跡にも同じ凹凸が確認できる。このことから、網目状の凹面を持つ道具で指オサエが施されたと考えられる。4 0 、4 1 は壺の底部である。平底であり、体部は膨らむが最大径が1 0 cmに満たない。4 0 は体部外面に工具痕が見られる。体部内面は放射状に板ナデを施した後、内面底部に指オサエを施す。4 1 は内面に密に指オサエを施す。4 2 ~ 4 4 は高杯である。4 2 、4 3 は口縁部で、4 4 は脚部である。端部外面を上方へ拡張する。4 5 は底部である。外面と底部に密なヘラミガキを施す。4 6 はミニチュア土器の底部である。甕が大きいため底径の復元はしていないが、直径3 cm前後と考えられる。4 7 は鉄鏃か刀剣類の劍先である。長軸は2. 8 cm、短軸は2. 0 cmである。厚さは0. 0 7 cmであるが、腐食のため中心部分から膨張しており、本来の厚さは不明である。

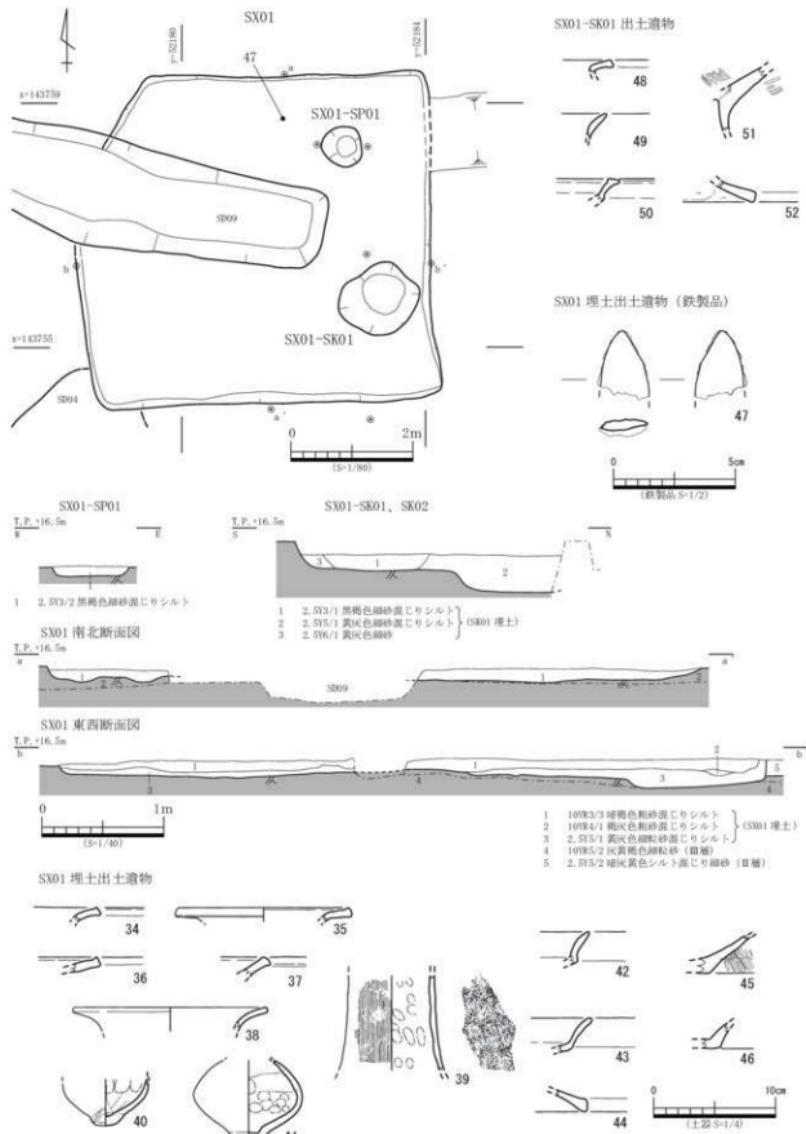
4 8 ~ 5 2 はS X O 1 - S K O 1 から出土した遺物である。4 8 は甕の口縁部である。口縁端部を下方へ拡張する。4 9 は甕の口縁部である。5 0 ~ 5 2 は高杯である。5 0 は口縁部であり、口縁端部上面にヨコナデを施す。5 1 は杯部と脚部の接合部の破片である。一部円盤充填の剥離痕が見られる。5 2 は脚部である。

所属時期 出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

(3) 土坑

S K O 2 (第12図)

調査区西側の北端で検出した土坑である。平面形状はやや歪な梢円形で、長軸は1. 3 4 m、短軸は0. 9 2 m、検出面からの深度は0. 2 7 mである。埋土は単層で灰黄褐色～小礫混じり細砂に黒



第11図 SX01 平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/80・1/40、1/4・1/2)

褐色土をブロック状に含む。また、親指～拳大の円礫を多く含んでいた。遺物は埋土の上部から下部にかけて多数の弥生時代の土器が出土した。遺物の破片は大きく、複数個体が乱雑に重なり合って出土した。この状況から、これらの遺物は土坑内に廃棄されたものと考えられる。

出土遺物 5 3～5 9は甕である。5 3は逆L字型口縁の甕である。口径は17.2cmである。外面の口縁部によりに16本1束の櫛描直線文を施し、それ以下は刺突文、タテ方向のヘラミガキか板ナデを施す。土坑の中央やや東側から、天地逆の状態で出土した。5 4は如意形口縁の甕である。外面に9本1束の櫛描直線文を施す。5 5は内面に密に横方向のヘラミガキを施す。5 6は復元口径18.3cmである。外面に櫛描直線文、体部中央にタテハケのち二列の刺突文を施す。5 7は復元口径が22.0cmである。外面にタテハケのちヘラミガキを施す。また、内面にヘラミガキを施す。5 8、5 9は底部である。5 9は内面にタテ方向の板ナデのちヨコ方向の板ナデを施す。6 0～6 2は壺である。6 0は口縁部である。土坑の中央付近から出土した。口縁端部の上下に拡張した部分に刻み目文を施す。内面に1条の突帯を貼り付け、刻み目文を施す。この刻み目文は連続しないが、剥離や欠損した状況は確認できない。阿方式土器の影響を受けた土器と考えられる。6 1は短頸壺である。復元口径は13.0cmである。外面口縁部付近はヨコ方向、体部には縱方向のヘラミガキを施す。頸部に長方形の工具痕が見られるため、タテハケも施されていたと考えられる。6 2は直立気味の頸部から口縁部が斜めに開く壺である。口径は15.1cmである。土坑の中央付近から出土した。口縁部は端部に向けて厚みを減じ、丸く収める。外面は口縁部から肩部まで幅3mm程度の粗いタテハケを施したのち、簾状文や櫛描直線文、櫛描波状文を施す。体部には斜方向のヘラミガキを施す。内面は口縁部や頸部、体部下半にヘラミガキを施し、肩部はナデや指オサエで仕上げる。6 3～6 6は底部である。6 3、6 4は外面にヘラミガキを施す。6 5は土坑の北側で検出した。

所属時期 出土遺物から弥生時代中期初頭である。

SKO 3（第13図）

調査区西側の北西端で検出した土坑である。遺構の大半が調査区外に広がっており、調査区内では緩やかに弧を描く平面形のみ検出した。本調査に当たってはSKO 3付近で湧水が非常に多く、丁寧な遺構検出ができなかったが、発掘調査後に行った工事立会において事業地外まで遺構が広がることがわかり、観察した部分から土坑と判断した。埋土は黒褐色シルトまじり粗砂の単層であり、親指大の円礫を多く含んでいた。遺物は1点出土した。また、土坑の縁辺部の掘削となつたためか、図化するに至らない程度の弥生土器片が多数出土した。

出土遺物 6 7は弥生土器の壺の口縁部である。緩やかに外反し、端部は断面方形である。

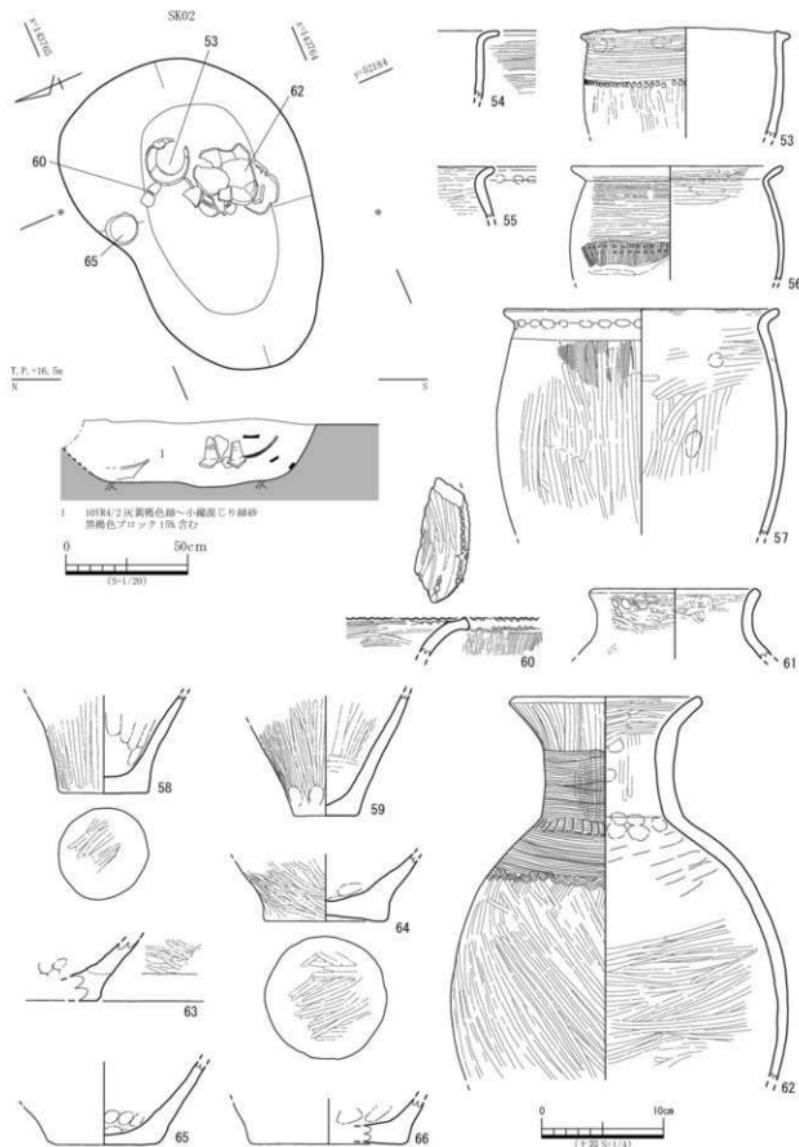
所属時期 出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。なお、SKO 2の埋土と類似していることがら弥生時代前期から中期に所属する遺構の可能性がある。

SKO 4（第14図）

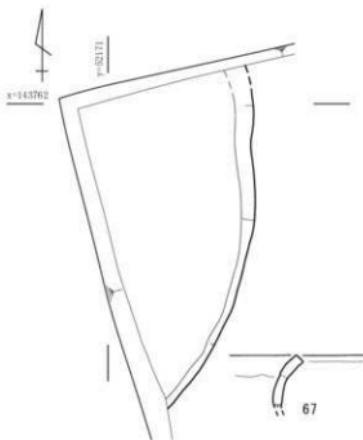
調査区の中央付近に位置するSDO 8、SPO 9の間で検出した土坑である。平面形状は楕円形で、南北方向に長く伸びる。長軸は1.5m、短軸は0.6m、検出面からの深度は0.12mである。埋土は褐色粗砂の単層である。遺物は1点出土した。

出土遺物 6 8は弥生土器の高杯の口縁部である。口縁端部上面にナデを施し平坦面を作る。外面に分割ヘラミガキ、内面にハケのち密にヘラミガキを施す。

所属時期 出土遺物から弥生時代後期前葉である。



第12図 SK02平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/20, 1/40)



第13図 SKO 3平面図、出土遺物
実測図 (S=1/40、1/4)

(4) 溝 (第15図)

SD 06

調査区中央付近に位置し、II層を基盤とした溝である。北端はSD 08に破壊されており、南側は調査区外へ続く。検出長は2.72m、幅は0.24m、深度は0.12mである。埋土は灰黄褐色粗砂の単層である。遺物は2点出土した。

出土遺物 69は甕の底部である。内面にヘラケズリを施す。70は製塙土器の脚部である。遺構の南端から出土した。体部外面にヘラケズリ、体部内面に指オサエを施し、脚部に指オサエを施す。

所属時期 出土遺物から弥生時代の遺構である。切り合い関係からSD 08よりも先行する。

SD 08

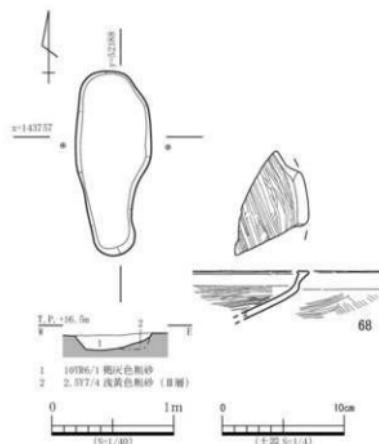
調査区中央付近に位置する溝である。南端でSD 06を破壊しており、SD 06の埋没後に形成されたことがわかる。検出長は8.78m、幅は1.82m、深度は0.12mである。埋土は灰黄褐色粗砂である。遺物は中世の遺物がわずかに混入するが、弥生土器片が主体を占める。また、鉄製品も出土した。

出土遺物 71～75は弥生土器である。71は甕の口縁部である。口縁端部を上下に拡張する。72、73は高杯である。72は脚部、73は杯部と脚部の接合部で、内外面に密にヘラミガキを施す。74、75は底部片である。76は土師質土器の小皿である。77は鉄製品である。長軸は3.9cm、短軸は2.7cmである。刀剣類の茎であると考えられる。

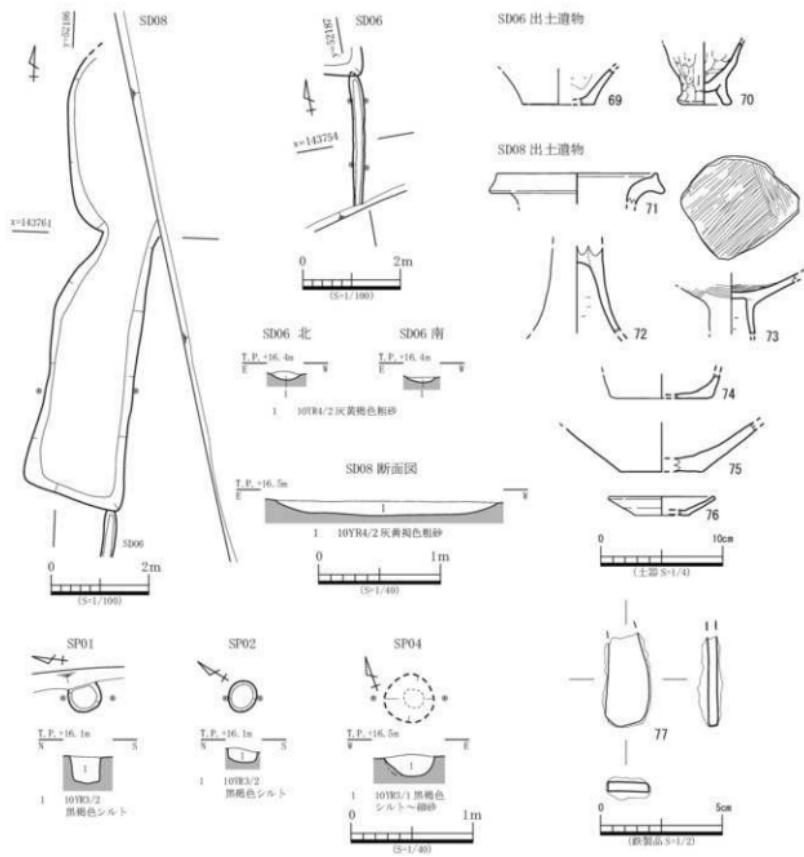
所属時期 主体を占める出土遺物の時期から弥生時代である。

(5) ピット (第15図)

SP 01



第14図 SKO 4平・断面図、出土遺物
実測図 (S=1/40、1/4)



第15図 溝・ピット平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/40・1/100・1/4・1/2)

調査区南東端に位置するピットである。直径は0.25m、検出面からの深度は0.22mであり、壁面は垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトの単層であり、遺物は出土していない。

所属時期 遺物は出土していないが、周辺で検出された遺構の配置や埋土の類似性から、弥生時代に所属すると考えられる。

S P O 2

調査区東側のSHO1の南側に位置するピットである。直径は0.25m、検出面からの深度は0.11mである。埋土は黒褐色系の単層であり、遺物は出土していない。

所属時期 遺物は出土していないが、周辺で検出された遺構の配置や埋土の類似性から、弥生時代に

所属すると考えられる。

S P O 3

調査区東側に位置するピットである。西側の一部をS H O 1 に破壊されている。直径は0. 2 2 m、検出面からの深度は0. 1 9 mである。埋土は2層に分かれる。上・下層とも黄灰色土であるが、上層の方が埋土の砂粒が細かい。遺物は出土していない。

所属時期 遺物は出土していないが、弥生時代後期中葉に所属するS H O 1 に破壊されていることから、それ以前に埋没したと考えられる。

S P O 4

S X O 1 の北側に位置するピットである。調査の過程で平面の記録を作成することはできず、平面形は断面図から復元した。S P O 4 の東西方向の幅は0. 4 m、検出面からの深度は0. 1 8 mである。埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

所属時期 遺物は出土していないが、周辺で検出された遺構の配置や埋土の類似性から、弥生時代に所属すると考えられる。

b 中世

(1) 溝

S D O 7 (第16図)

調査区中央東側に位置し、Ⅲ層を基盤とした溝である。南北方向に伸び、南側で竪穴建物跡を破壊している。調査区南端では、西肩がやや膨らんでおり、調査区よりも南側では西へ屈曲する可能性も考えられる。検出長は1 2. 2 m、幅は2. 3 ~ 3. 7 m、最大深度は0. 5 2 mである。埋土は層相から、掘り直しを行っている可能性が考えられる。なお、S D O 7 の底部の高さを比べると、南北両端の深度は深いが、中央付近では約2 3 ~ 3 0 cm浅くなっている。一定の深度ではないという特徴がある。

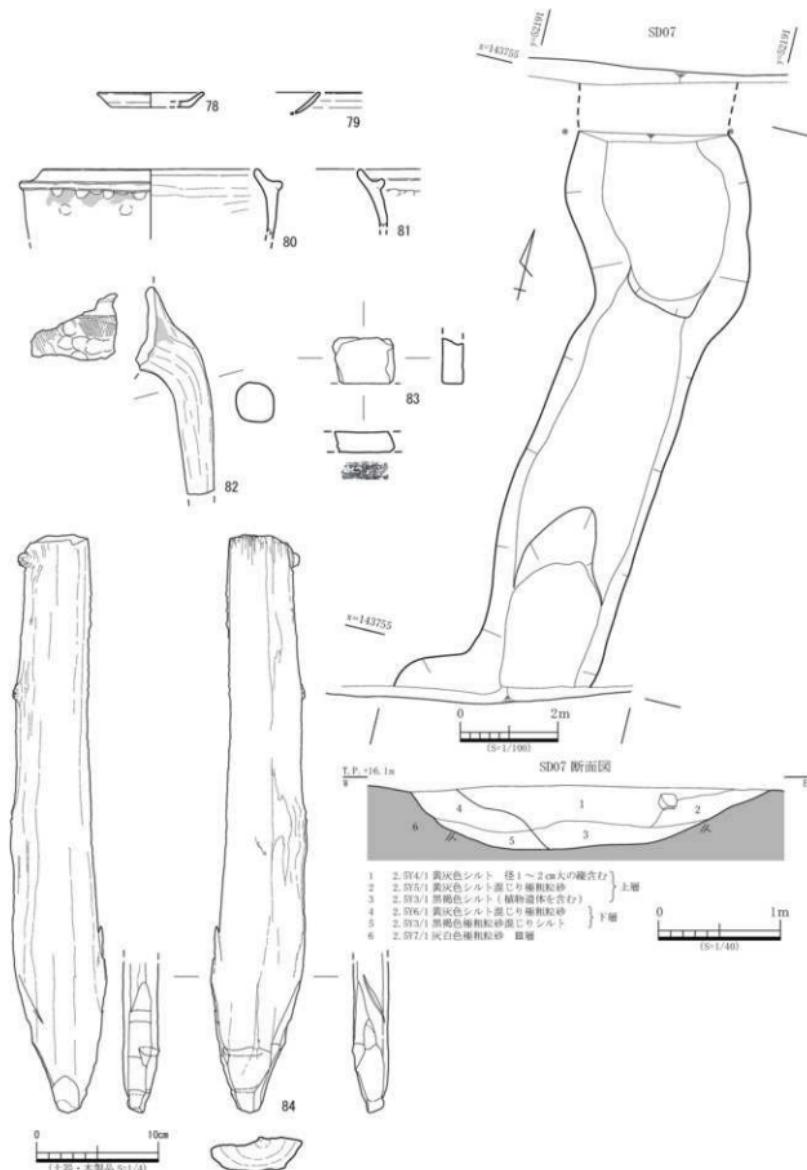
遺物は主に北側の底面付近で出土した。また、竪穴建物跡を破壊する中央付近は弥生土器片が混在していた。

出土遺物 7 8 ~ 8 2 、8 4 は北側の底面付近で出土した遺物である。7 8 は土師質土器の小皿である。復元口径は8. 5 cm、底部の切り離し方法は回転ヘラ切りである。口縁端部に煤が付着するため、燈明皿として使用されたと考えられる。7 9 は土師質土器片である。8 0 ~ 8 2 は足釜である。8 0 は鉗部付近に煤が付着し、鉗部内面付近には強いヨコナデを施す。8 2 は足釜の脚である。体部内面はハケのちヨコナデや指オサエを施す。脚部との接合部付近に煤が付着する。8 3 は平瓦片である。「林善」の刻印が見られるため、幕末から明治時代の遺物であると考えられる。主体を占める時期の遺物ではないことから、混入品と考えられる。8 4 は木製の杭である。丸太を縦に半裁したのち先端部のみ尖らせるように加工している。上端は槌等で強く叩いたためか潰れたように丸くなっている。

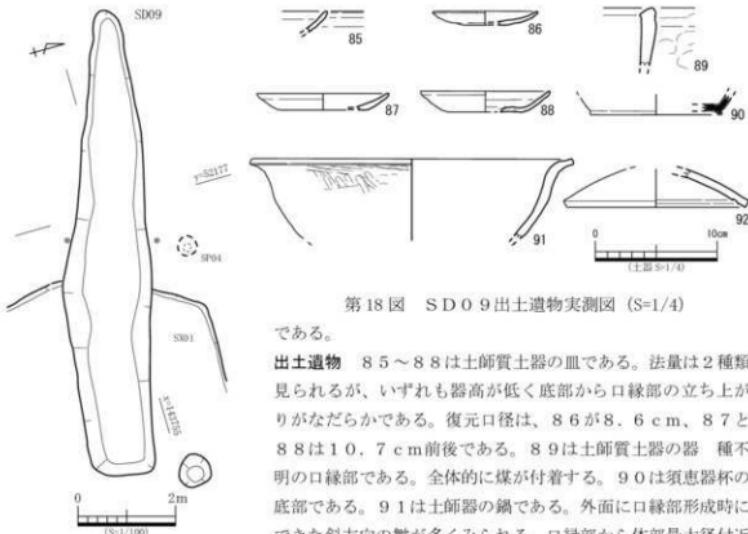
所属時期 出土遺物から中世後半である。

S D O 9 (第17、18図)

調査区西側で検出した溝である。東西方向に伸び、東側はS X O 1 を破壊する。両端とも途中でなだらかに立ち上がり、東西へは続かない。検出長は9. 5 m、最大幅は1. 8 5 m、深度0. 2 2 m



第16図 SD07 平・断面図、出土遺物実測図 (S=1/100・1/40、1/4)

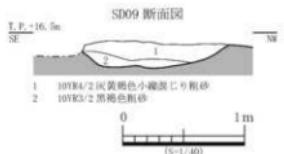


第18図 SD09出土遺物実測図 (S=1/4)

である。

出土遺物 85～88は土師質土器の皿である。法量は2種類見られるが、いずれも器高が低く底部から口縁部の立ち上がりがなだらかである。復元口径は、86が8.6cm、87と88は10.7cm前後である。89は土師質土器の器一種不明の口縁部である。全体的に煤が付着する。90は須恵器杯の底部である。91は土師器の鍋である。外面に口縁部形成時にできた斜方向の皺が多くみられる。口縁部から体部最大径付近まで黒色化する。92は瓦質土器片である。器高が浅いことから蓋と考えた。内面にミガキを施し、口縁部に沈線を施す。

所属時期 古墳時代末から古代の遺物も含むものの、埋土の特徴と主体を占める遺物の時期から中世末である。



第17図 SD09平・断面図

(S=1/100・1/40)

c その他の時代

(1) 土坑

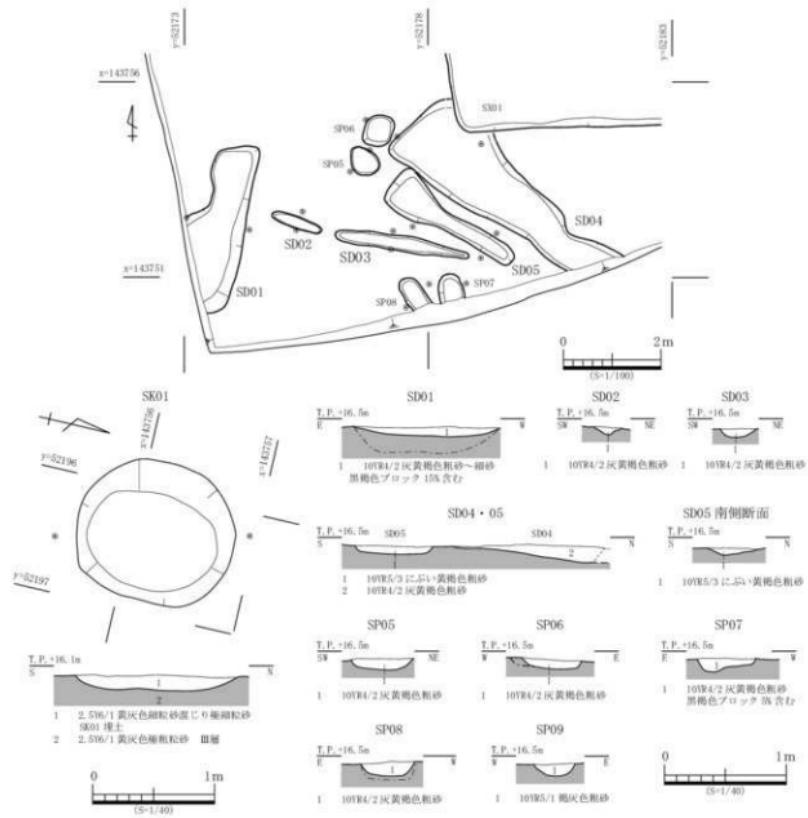
SKO1 (第19図)

調査区東側の南端で検出した土坑である。平面形状は梢円形で、長軸は1.3m、短軸は1.15m、検出面からの深度は0.11mであり、SHO1の西側の一部を破壊する。埋土は黄灰細粒砂混じり極細粒砂の単層である。遺物が出土しなかつたため、所属時期は不明である。

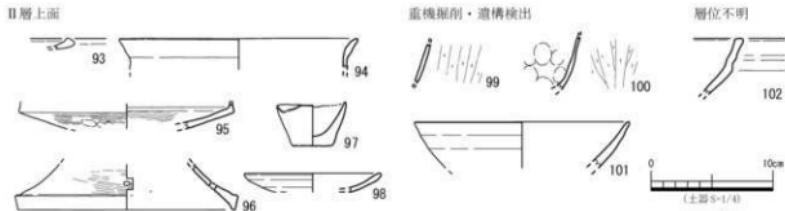
(2) 溝 (第19図)

SD01

調査区西端で検出した溝である。おおよそ南北方向に伸びており、検出長は3.48m、幅は1.2m、検出面からの深度は0.07mである。埋土は灰黄褐色粗砂の単層である。遺物が出土しなかつたため、所属時期は不明である。



第19図 その他の時代の遺構 平・断面図 (S=1/100・1/40)



第20図 遺構外出土遺物 (S=1/4)

SD 0 2

調査区西側 SD 0 1 の東隣で検出した溝である。東西方向に伸びており、検出長は 1.05 m、幅は 0.22 m、検出面からの深度は 0.05 m である。埋土は灰黄褐色粗砂の単層である。遺物が出土しなかったため、所属時期は不明である。

SD 0 3

調査区西側、前述した SD 0 2 の東隣に位置する溝である。東西方向に伸びており、検出長は 2.78 m、幅は 0.22 m、検出面からの深度は 0.06 m である。埋土は SD 0 2 と類似しており、幅や深度、遺構の位置からも SD 0 2 と同一遺構であると考えられる。遺物が出土しなかったため、所属時期は不明である。

SD 0 4

調査区西側の南端に位置する溝である。上面に II 層が被覆しており、II 層を除去したのちに検出した。南東から北西方向に伸びており、北側は調査区外へ伸び、南側は SX 0 1 に破壊されている。検出長は 4.64 m、幅は 1.24 m 以上、検出面からの深度は 0.12 m である。埋土は灰黄褐色粗砂の単層である。遺物は出土しなかったため、所属時期は不明である。

SD 0 5

調査区西側の SD 0 4 の西隣に位置する溝である。SD 0 4 に並行して伸びており、検出長は 2.9 m、幅は 0.85 m、検出面からの深度は 0.06 m である。埋土はにぶい黄褐色粗砂の単層である。遺物が出土しなかったため、所属時期は不明である。

(3) ピット（第 19 図）

SP 0 5 ~ 0 9

調査区西側の SX 0 1 の南側で 4 基、調査区中央付近で 1 基のピットを検出した。直径は 0.45 ~ 0.7 m 程度、検出面からの深度は 0.1 m 程度であり、埋土は灰黄褐色粗砂の単層である。遺物が出土しなかったため、所属時期は不明である。

(4) 遺構外出土遺物（第 20 図）

9 3 ~ 9 8 は II 層上面で出土した遺物である。9 3 は壺の口縁部である。端部を僅かに摘まみ上げる。9 4 は鉢の可能性がある口縁部である。9 5、9 6 は高杯である。9 5 は杯部である。内外面にヘラミガキを施す。9 6 は脚部である。中ほどに円形の透かし穴を施す。9 7 はミニチュア土器である。底部から湾曲気味に体部が伸び、そのまま口縁部へと収まる。9 8 は土師質土器の皿である。

9 9 ~ 1 0 1 は重機掘削及び遺構検出中に出土した遺物である。9 9、1 0 0 は弥生土器の製塙土器の体部である。外面にタテ方向のケズリ、1 0 0 は内面に指オサエを施す。1 0 1 は陶器の碗である。

1 0 2 は層位不明遺物である。弥生土器の鉢の口縁部である。

第IV章 総括

第1節 本調査地の調査成果

今回の調査では弥生時代から中世の遺構と遺物を検出した。以下、各時代の遺構について概観する。

弥生時代中期

本調査地で最も古い時期の遺構は、中期初頭の遺構である。土坑を2基確認した。このうち土坑(SK02)からは中期初頭の土器がまとまって出土し、一括性が高いと考えられる。この時期以降、弥生時代後期中葉まで本調査地では明確な遺構は検出していないが、II層上面やSHO1埋土中から中期の遺物が少量出土した。当該期は土地利用が開始されるも低調であり、周辺の調査成果もふまると、調査地より北側で居住域が広がっていた可能性がある。

弥生時代後期

調査区南側と東側を中心に弥生時代後期中葉に所属する竪穴建物跡1棟と、溝2条、ピット4基、性格不明遺構1基を検出した。本調査地で最も遺構が多く形成される時期と言える。竪穴建物跡(SH01)は平面円形で床面積は80m²以上であり、同時期に所属する竪穴建物跡の中でも非常に大きい部類に入る。性格不明遺構(SX01)は掘り形の規模等から竪穴建物跡の可能性がある遺構である。鉄鏃も出土しており、重要な遺構の一つである。なお、SH01はII層に被覆され、SX01はII層を基盤とすることから、層位的にはSH01が先行するという前後関係にあるが、SH01とSX01出土遺物に明確な時期差は確認できなかった。このため、比較的短期間でII層が形成された可能性が考えられる。

当該出土遺物のなかで特筆すべきは、製塙土器が比較的多く出土したことと鉄製品が出土したことである。製塙土器は遺構外出土の遺物を含めて7点出土し、この集落の遺物組成の一定割合を占めるようだ。鉄製品はSX01から鉄鏃が出土し、SD08から刀剣類の茎が出土している。遺物全体の量はそれほど多くないが、注目すべき遺物と言える。

古墳時代・古代

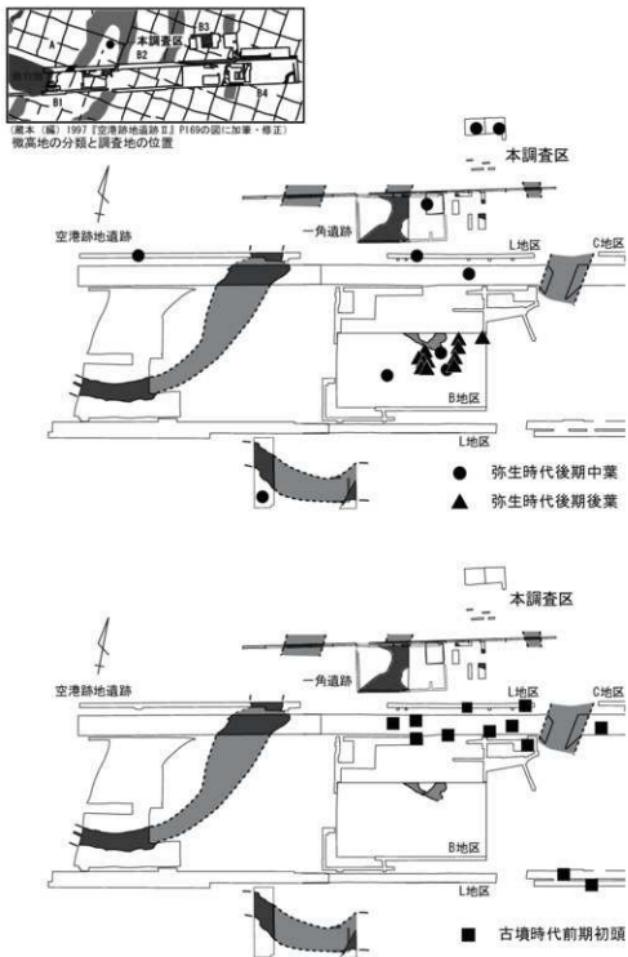
本調査地では、弥生時代後期中葉以降、中世後半までの遺構は検出していないが、II層（遺物包含層）や後述する中世の溝に古墳時代や古代の土器が少量含まれていた。調査地周辺の自然流路（宮西・一角遺跡SR01、02、03）が古代まで低地部として残るという周辺の調査成果もふまると、それらの自然流路に挟まれた本調査地も、弥生時代の集落以降必ずしも居住地として長期間利用できる場所ではなかつたと考えられる。

中世後半

中世の後半に所属する溝を2条検出した。出土遺物が少量のため明確な時期比定はできなかった。周辺の宮西・一角遺跡の第2・3次調査区や一角遺跡と同様に、前時代から続き遺構・遺物が希薄であったと考えられる。

第2節 本調査地の位置付け（第21図）

当地は弥生時代後期中葉に居住域として土地利用が活発となるが、それ以外の時代では低調であった状況が読み取れた。第II章で既述したが、弥生時代後期中葉は調査区周辺でも遺構・遺物が多く出土している。弥生時代後期中葉から古墳時代前期初頭における空港跡地遺跡全体の集落動態について



第 21 図 本調査地周辺の建物遺構配置図

乗松真也がまとめており（乗松 2004）、これを基に周辺の調査成果との関連性を検討する。

弥生時代後期中葉は空港跡地遺跡 L 地区や B 地区で竪穴建物跡が検出されていることから、蔵本分類の B 1 微高地の中央やや北よりに居住域が広がると想定できる。この他に一角遺跡で後期中葉に所属する可能性がある竪穴建物跡が 1 棟検出されており、今回はそれより北側でも竪穴建物跡を検出した。これによって、当該期の居住域の範囲は少なくとも本調査地まで広がることが明らかになったと

言える。弥生時代後期後葉は、空港跡地遺跡B地区で竪穴建物跡が10棟検出されていることから、B1微高地の中央付近に居住域が集中するようである。

古墳時代前期初頭になるとB1微高地及びB2微高地の中央やや北よりに居住域の中心が移動し、空港跡地遺跡L地区と、隣接するC地区を中心に複数の竪穴建物跡が検出されている。乗松はそれまでの集落景観と大きく異なる点として、竪穴建物跡がより密集する点を指摘している（乗松2004）。この指摘をふまえると、B1、B2微高地の中央付近に高密度で居住構造が形成されるのが当該期と言える。換言すると、B1微高地の北側の本調査地周辺の土地利用は後期中葉以降に所属する遺物の出土量が少なくなるという点を指摘でき、このことから本調査地周辺は弥生時代後期中葉を境に居住域としての土地利用が低調となつたことが、周辺の調査成果と合わせて指摘できる。

以上のことから本調査地の調査成果は、特に本調査地周辺の弥生時代後期の集落動向を理解する場合に、重要な成果と位置付けられる。

参考文献

- 藏本晋司 1997『地形環境の復元』『空港跡地遺跡II』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・香川県土地開発公社
香川県教育委員会 2007『空港跡地遺跡IX』香川県教育委員会
乗松真也 2004「第4章 調査の成果」『空港跡地遺跡III』香川県教育委員会・香川県土地開発公社

写 真 図 版

写 真 図 版 目 次

図版 1	1 調査区東半 全景（北東から）	5 SP04 断面（南から）
	2 調査区東半 全景（南から）	6 SK03 完掘状況（北から）
図版 2	1 調査区西半 全景（南から）	図版 9 1 SD07 完掘状況（南から）
	2 調査区西半 全景（東から）	図版 10 1 SD07 遺物出土状況（北東から）
図版 3	1 調査区東半 東側壁面①（西から）	2 SD07 断面（南から）
	2 調査区東半 東側壁面②（西から）	3 SD08 断面（北から）
	3 調査区東半 東側壁面③（西から）	4 SD09 断面（南東から）
図版 4	1 SH01 床面検出状況（北から）	5 SD08 完掘状況（北から）
	2 SH01 調査状況（北東から）	図版 11 1 SH01 出土遺物①
図版 5	1 SH01-SK01、SK02 検出状況（西から）	2 SH01 出土遺物②、SX01 出土遺物①
	2 SH01-SK01、SK02 断面（南東から）	図版 12 1 SH01 出土土器③
図版 6	1 調査区東半 II層と SH01 の関係（東から）	2 SH01 出土土器④
	2 SH01 B-D 断面（南西から）	3 SX01 出土遺物②
	3 SH01-SP01 断面（北から）	図版 13 1 SK02 出土遺物①
	4 SH01-SP03 断面（南西から）	2 SK02 出土遺物②
	5 SH01-SP04 検出状況（南西から）	図版 14 1 SK02 出土遺物③
図版 7	1 SX01 調査状況（南西から）	2 SK02 出土遺物④
	2 SX01-SK01 断面（東から）	3 SK02 出土遺物⑤
	3 SX01 南北断面 南側（西から）	4 基本土層（II層）出土遺物
	4 SX01 東西断面 西側（南から）	5 SD06 出土遺物
	5 SX01 鉄製品出土状況（西から）	図版 15 1 SD07、SD09 出土遺物
図版 8	1 SK02 断面（北西から）	図版 16 1 鉄製品 X線写真（俯瞰）報告番号 47、77
	2 SK02 遺物出土状況（北東から）	2 鉄製品 X線写真（側面）報告番号 47、77
	3 SP01 断面（西から）	
	4 SP02 断面（西から）	



1 調査区東半 全景（北東から）



2 調査区東半 全景（南から）



1 調査区西半 全景（南から）



2 調査区西半 全景（東から）



1 調査区東半 東側壁面①（西から）



2 調査区東半 東側壁面②（西から）



3 調査区東半 東側壁面③（西から）



1 SH01 床面検出状況（北から）



2 SH01 調査状況（北東から）



1 SH01-SK01、SK02 検出状況（西から）



2 SH01-SK01、SK02 断面（南東から）



1 調査区東半 II層と SH01 の関係（東から）



2 SH01 B-D 断面（南西から）



3 SH01-SP01 断面（北から）



4 SH01-SP03 断面（南西から）



5 SH01-SP04 検出状況（南西から）



1 SX01 調査状況（南西から）



2 SX01-SK01 断面（東から）



3 SX01 南北断面 南側（西から）



4 SX01 東西断面 西側（南から）



5 SX01 鉄製品出土状況（西から）



1 SK02 断面（北西から）



2 SK02 遺物出土状況（北東から）



3 SP01 断面（西から）



4 SP02 断面（西から）



5 SP04 断面（南から）



6 SK03 完掘状況（北から）



1 SD07 完掘状況（南から）



1 SD07 遺物出土状況（北東から）



2 SD07 断面（南から）



3 SD08 断面（北から）



4 SD09 断面（南東から）



5 SD08 完掘状況（北から）



1 SH01 出土遺物①



2 SH01 出土遺物②、SX01 出土遺物①



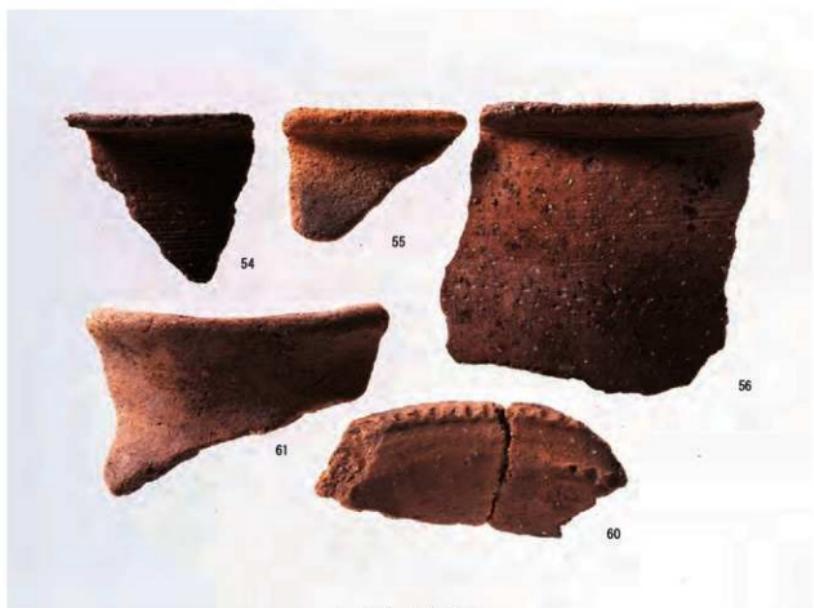
1 SH01 出土土器③



2 SH01 出土土器④



3 SX01 出土遺物②



1 SK02 出土遺物①



2 SK02 出土遺物②



1 SK02 出土遺物③



2 SK02 出土遺物④



3 SK02 出土遺物⑤



4 基本土層（Ⅱ層）出土遺物



5 SD06 出土遺物



1 SD07、SD09 出土遺物



1 鉄製品 X線写真（俯瞰） 報告番号 47、77



2 鉄製品 X線写真（側面） 報告番号 47、77

報 告 書 抄 錄

林町集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

宮西・一角遺跡（第8次調査）

令和元年8月30日

編集	高松市教育委員会 高松市番町一丁目8番15号
発行	瀬賀 一哉 高松市教育委員会
印刷	有限会社 中央ファイリング